
ライデビル

直樹将軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ライデビル

【Nコード】
N6073K

【作者名】
直樹將軍

【あらすじ】
悪魔と契約によって手に入れた力が神を喰らうことで異常に膨れ上がった。
そんな彼が生き残るため下した決断は、異世界で生きること。
作者の自己満足小説ここに光臨。

プロローグ・終わり

俺は、悪魔使いに生まれてきた。

ここは、遊馬家^{あそまけ}。

荒れ狂った神と捻れた世界を直すために、生まれた家系だ。

そのために、その為だけに悪魔と契約する。

契約した悪魔と術者の力や相性によってその禁断の能力を得る。

ある者は武器を作る能力に長け、ある者は魔力を得る。

そして俺は、人とは、すこし違う能力を得た。

そう・・・それは、あまりに黒かった。

体を悪魔に貸す。

それによって力を得る。

そんな契約内容だからいつしか友情に近いなにかを悪魔と得た。

「おい、悪魔貴様の名前なんだ。悪魔、悪魔と呼ぶのは面倒だ。」

「私^{わたくし}アナタに名前を貰いたい」

「ならライLieと書いてライだ。貴様にぴったりの名だろう。」

「ええ、遊馬^{あそま}太陽^{ソル}がそう思うなら・・・」

.....それから5年ほどの時が経った。.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

すると右眼までも悪魔の眼に変わる。

父が追い詰めたであろう神がそこにいた。
神は、風前の灯火だった。

しかし、神はすぐに、体の再構築を始める。
しかし、ムダな努力とは、神は判っていた。

目の前には、友情を帯びた悪魔によって左腕と右眼を悪魔に転生した、悪魔が立っていたのだから。

悪魔の左腕が神を喰らう。

しかし太陽の命も終り近づいていた。

神の作った毒。神ですら解毒は不可能だった。

「太陽が死ぬなら私も死んでやるう。しかし生憎死ぬ気はない。だから・・・」

異世界に神を喰らったエネルギーをつかって飛ぶぞ。」
そう生きる為に。

飛んだ

プロローグ・終わり（後書き）

13歳の暇人ここに光臨！！

作者の現実逃避に付き合ってください（ええ

異世界

「ん・・・ここは」

太陽の眼が覚める・・・。

すると太陽が自分の体の異常に気付いた。

傷が一つもなく、ライと一体化した感覚があるのだ。

「おい、ライ出てこい。」

すると頭の片隅でライが語りかける。

「ハイ御用ですか。」

すると太陽はライの様子がおかしい事に気がつく。

「なぜ、姿を現さない？」

悪魔というものは、この人間や悪魔以外の生き物が住むところに来るときは、れいたいか霊体化しなければならぬ。

しかし遊馬家には、それが見える。

いつもなら、霊体化した悪魔がそこに見えるのだが・・・
姿を現さない。

「遊馬様は、神の毒を受けて、死ぬ寸前でした・・・。悪魔と一体化することで毒をかき消すことができる。だがアナタの体ではそれに耐える事はできない。しかし神を喰らったことにより、アナタの力は

異常に膨れ上がってました。それにより、一体化し、最後の力によつてこちらの世界のに飛びました。」

太陽は周りを見まわした。

見渡す限りの草原。

「元の世界と違うのは、解った。だが何故飛ぶ必要があったのだ。」
「神の力を消費する必要があったのです。あのままでは、光の気が、一体化した私と太陽までも焼き尽くした。」

その光の気的大量消費が、世界を飛ぶことだったので。」
そのまま安心してください。とライが続ける。

荒れ狂った神だった故に光が薄かった、だから神の力の一部はまだ太陽の一部。

言語も神の力により、伝わるようになる。というのはライの弁。それから、草原を歩き始める。

咄嗟の判断だったから、どんな世界にきたのか、解らない。そう危惧しているとその危惧が当たった。

グオオオオ〜

そう魔物が現れたのだ。

一匹や二匹ではない。数えきれない数の魔物だ。

しかも数種類。

ゴリラに鎧をつけた様な奴や、チータのような姿で炎を纏っていた魔物もいた。

「おい、ライ。お前の力も使えるってことだよな。教えてくれ。面白そうだ。」

するとライの記憶の一部が頭に傾れ込む。

「ホントに面白そうだ。」

そう呟くと太陽が左手をあげる。

するとその手に、雷が落ちる。

そして、飛びあがった。

「飛翔、雷落とし。」

飛びあがってボスの様なゴリラの脳天に落ちる。

地面を伝って周りの魔物も感電して倒れる。

大半の魔物が逃げてしまった。

「まだやるのか。」

そう睨みつける。

すると右眼を見た魔物がすべて逃げだした。

一匹も残らなかった。

すると魔物の大群のご真ん中に一つの馬車が見えた。
既にボロボロだったが、生命は感じられる。
馬車を開けて中に入ると一人の美女がいた。
青い髪を腰のあたりまで下ろし、眼は淡いブルー。
女性らしい体型。胸もそこそこ。

驚いたように眼を開いた。

「もう死ぬと生きていたのに。アナタが助けてくれたのね。ありがとう」

そういうと、太陽の顔を覗き込んだ。

か、かつこいい。

そう思った。

何もかも包み込む様な黒の髪。美形としか言いようがない顔立ち。常に潤っている唇。すつきりとした鼻。

何よりも悪魔の様な右眼一（実際に悪魔のだが）に秘められた美しさに。

太陽自身も気づいていないのだが、左眼は神の神々しい光が秘められていた。

「そうだね。アナタ旅人でしょ。なら私の家に泊らない。そこで珍しいものも見れるでしょうし。」

「ああ、行くあてもないんだ。頼む。俺は遊馬太陽。太陽って呼んでくれ。」

「ソルか、いい名前ですね。私はミラノ・ソフィア。ソフィって呼んで。」

そうして、この世界で食事にありつけるかもと安堵していた。

異世界（後書き）

不定期更新（ええ
かもしねません。

なんかテンプレ

ここは、ソフィの家。

訂正しよう。

ソフィの城。

そこで、ソフィは、父、母に無事戻ったことや助けられたことを話した。

こうして太陽は盛大にミラノ家に迎えられた。

太陽はメシにありつけていた。

「助かりました。私は迷子だったんですよ」

太陽はいままでのように、どっか貴族風に喋っても良かったのだが、ライに注意されたので、口調を変えていた。

しかしそんなことよりも、ソフィは気にしている事があった。

まっ迷子！！

もちろん、旅する者であっても、迷子になる初心者くらいはいたのだが、目の前のこのかっこいい少年が迷子！！

困惑していた。

しかし次の瞬間には、思考が既に働いていた。

「じゃ、じゃあ、今日一日過ごしたら直ぐに出て行ってしまうのですか。」

上目使いに涙目最強のコンボ。

余談だが、太陽は異性に対する欲がないわけではない。

元の世界で女性に告白したこともある。

しかし、その女性は、「他に命を助けられた人がいる。その人が好きだ。」という理由で呆気なく敗れ、

鈍感&ほとんどの女性への欲を断っていた。

そんな太陽だったが、この最強コンボには呆気なく敗れ、

「あの出来れば居させてもらいたいなあ、なんて・・・ははっ」
すると、ソフィが

「ありがとうっ」

と喋って抱きしめてきたので、「ぐはぁ」と心の中で思っているよ。
「太陽はいつからこんな、アホになってしまったのでしょうか。」
とライが話しかけてくる。

そして冷静になった、太陽が、疑問におもっていた事を口にだす。

「ソフィって、貴族かなにか？」

するとソフィは目を丸くする。

「……っつー!!ミラノ家を知らないの!？」

「はい」

爽やかに答えた。

「ふう。あゝ……あゝオツホン」

なにかの演説をするように、咳払いをする。

「じゃあ改めて自己紹介をするわね。私の名前は、ミラノ・ソフィ

ア、この国の第三王女よっ」

「……」

now loading

「うん。はい分かりました。うん。テンプレ的なアレですね。」

「ええええ〜」

すると頭の片隅からライの声か

「私は何となく気づいてましたから。いいですけど、それくらい分らないから女性にフラれるんですよ」

「うるさいっ」

なんて遣り取りをした後に、思い出したように、太陽が聞く。

「あの馬車の中で言ってた、面白いことって……まさか処刑です

か。」

すると、ソフィが「そんなわけないでしょう」「と言わんばかりに、ため息を吐く。

「勇者の召喚よ。」

困った。

困った。

そんな神聖な場所にいたらライが死んでしまうぞ。

「大丈夫よ。光と闇の属性両方を合わせて使うから」
！！

「人の心を読むなあ。」

まあそんな訳では、ないとは信じていたが。

体から漏れ出す闇の魔力が多いからそう思ったらしい。

「で勇者召喚のなにか、面白いのですか？」

まあ当たり前質問だ。

「召喚された人は面白いかもしれないが、見ているのは面白い、というより腹が立つと思うが？」

しかしこの姫には、ある程度こちらの事情が分かる様だ。

武器をもっていないく、旅人を名乗った太陽等を可笑しいと判断していた。

「で、彼方は何者!？」

「仕方がない……。話すから、そこに隠れてコツチを狙っている者をどうにかしてくれ。」

すると、この食堂?の二階から飛び降りてきた。

「俺を見つけるとは腕もなかなか・・・」

太陽は、話を始めた。

悪魔使いということは、言わず、倒した対象も大悪党に偽って、死んだら、たまたま記憶をもったまま飛んできた。ということにした。
「それならちよつどいいわ。勇者のパーティに加わったら、そしてら面白そう」

太陽が、コノ娘殺シテヤロウカ。

等と思っている間に話は勝手に進み、勇者のパーティに加わる事が決定した。

「それじゃあ、そろそろ行きましようか。」
そういつて腕に抱きついてくる。

あ、当たってる。二つの山が当たってる。やっやめる。飛ぶなっ理性。

なんだツンデレかあ、クソツ
可愛いじゃねえかあ。

そんな事をいつている間に裁断に着いた。

裁断の端っこに立たされるとそこで待つている様に言われた。

「bibv g i n a s i u i u h a v b m h u i b y a o h c o
a o i」

儀式が始まった様だ。

まあそれ程長くはなさそうだ。

そうして30分が経つと魔法陣から光が出てきて人を象り、そこに目や鼻や色が付いて完璧な人となる。

「.....っつ。ここはどこだ。」

それから、姫の説明が始まり、同じく勇者のパーティとして俺が召喚されたと紹介した。

「なるほど、俺は勇者か、笑えなくね。まあいいや、じゃあ早く説明してくれないか。色々。おっと失礼。」

俺は五十嵐翔（いがらし、かける）よろしく」

この男礼儀がいいのか、悪いのか。

そして、武器決めに入る。

「で、でけえ」

翔と太陽がそういつた。

門がでかいのだ。

マ コ・デラックスが立てと横に十人づつ並びながら入れる大きさ

と言えは分るだろうか。

そんな門をソフィが片手で開けると宝石が散りばめられた武器がいっぱいあった。

「この中から、武器を一つだけお取り下さい。」

すると翔は魅入られる様に取りに行く。

「うーん、テンプレ」

と言いながらも、武器を取りに行く。

すると、二つひと組のピストルが目に入った。

何故二つひと組と分かるかというと、鎖で繋がれていたからである。

そして、それに手を伸ばし掴んだ瞬間

意識は闇と太陽に引き込まれて行った。

なんかテンプレ（後書き）

直接打ちなんで、ここで一旦話切ります。（ええ

しかし、なんとというか、良い作文ソフトはないものか。

まあ、気づいたら、直接打ってるわけですが。

頭に文いれてから、1時間以内に打たないと話が違う方向にいきま
す。

どまあ。勇者。（前書き）

え、僕は、今怒っています。

僕の学校の、ん や君のせいです。

埋めましょうか。

はい、ひとり言です。

僕が悪かったです。

僕が、埋まります……。。

どまあ。勇者。

「……………」

ここはどこだ？

周りを見回す。

しかし、暗い闇の中何も見えない。

しかし恐怖は感じない。

記憶を掘り返す。

「鎖で繋がれた黒いナイフと白いピストルに触れたら、意識が遠のいて……」

思い出したら余計可笑しくなった。

「ああ、そっか今までの事全部夢か。地獄に落ちたのかな、はは。

あ……おばちゃん、しょうがないなあ。今そっちにいくからね……

。……つは！！よく考えたらおばあちゃんまだ死んでないっ」
INSUJUNSUJK
末期の様です。

ああ、私が無理やり異世界に飛ばしたかたら、こんなバカに……。

「おい、聞こえてるぞライ。」

と微笑ましい？遣り取りとっていると、

空から、太陽が倒したはずの、神が降りてきた。

「なっ」

そう驚いてもすぐ戦闘態勢に入るのも流石である。

しかし、神は口を開く事はなかった。

疑問に思い手を伸ばしたときライが空から降りてきた。

「どういう事だ、ライ」

しかし話かけてきたのは、頭の片隅のライだった。

「はて。何故私がいるのでしょうか。」

「俺の方が聞きたいよ。」

しかし、このライもしゃべらない。

すると、また空から何かが降りてきた。

一匹の狼。

色はない。

いや訂正する。

この表現を聞くと白を想像するだろうが……。

本当に色がない。

透明でもない。

そう、人の眼では、表現できない色だ。

するとその狼が話かけてきた。

「我を眠りから起こしてくれた様だな。礼をいう。ありがとう。」

沈黙がたつぷり5秒程。

「で……ここはどこでしょうか。」

すると狼が口を動かす。

「ほう。知らなかったのか。まあいい」

すると、狼が凄い勢いで喋りだす。

なかなかシユールな絵だ。

「我は、いや、我らは貴様の力だ。こちらの二つの力は、貴様が喰ったのだろう。」

まあいい。お前が武器を手にしたのは覚えているだろう。もう一度言っが我は貴様の純粹な力だ。

それで、だ。貴様は既に、力を手に入れている。忠告しにきた。

この武器は古代兵器だ。

お前が理性を失いこの力を扱えば、貴様の精神は、壊れる。

武器は貴様が願えばでてくる。左手で願えば刀が、右手で願えば、銃がでてくる。

まあ気にするな。もう15秒もすれば帰れる。」

「お前の名前は。」

「ルソ。まあ汝の名前を反転させたただけだがな。」

すると闇に光が当たり、意識が戻される。

「よろしくな。ルソ。」

すると宝物庫で倒れていた。

起きてみると心配している、ソフィと・・・翔？がいた。

あ。別に翔が別人に見えた訳ではないよ。

そんな失礼な訳ないでしょ。

ただ、名前を忘れてただけだよ。ちなみに名字も。

まあ適当に説明した。

ちなみに、翔はそんな現象起きなかったらしい。

ごまあ。

どまあ。勇者。(後書き)

マコ・デラックスWWW
WWW
WWW
WWW
WWW
実は男。

「えーと、次は国の政治の一部。」

「これも俺の手に負えるレベルではないようだ。任せたぞ。翔君」
「お前仕事する気ないだろ。」

「何をいつているんだ。ボクハユウシャのナカマダゾ。」
するとソフィが涙目で訴え掛けてきた。

「ごめん。ふざけすぎた。やることが見つかるまでは、ソフィの言うこと聞くつもりだから。」

そういうと太陽はソフィの頭に手を伸ばし頭をなでる。

「うう〜／＼／」

ソフィが顔を赤くして俯いていたが、これと同時にルソが神の力の説明をしたので知るよしもなかった。

「我としたことが説明し忘れた。神を喰ったお前が神と同等の力を得た。それでお前が、時間が経つことに

神の力が回復していき最後には、神になる。これから神として色々あるだろうが頑張ってくれ。」

そういうと会話が終わる。

「それで魔法学園にも付いてきてもらいたいのだが・・・」

「いいよ」

翔とはもった。

そして学園に行くことが決まったのだが、勇者の翔には、聖剣を渡すらしい。

「それでは、聖剣の授与を始める。これは勇者しか鞘から剣が抜けない。」

太陽は暇になったので聖剣に手を伸ばし鞘から抜こうとする。

スウーカチャ

「誰も見てないよな。」

マジで。聖剣抜けちゃった。(後書き)

すみません。はい。投稿遅れた理由とすれば春休みの宿題やってました。

俺は勇者として認められたが別にこれまでと
変わらないらしい。

「じゃあ魔法学校に行こう。」

「?なんでそんなに・・・」

「ん?」

「なんでもない」

それで夜の校舎に着いた。

職員室に入る。

そこに少し太った先生がいた。

ス ムダククの安西先生にしか見えない。

「待っていましたよ。入学希望者ですね。ではこちらへ」

先導されるままに歩く。

一つの部屋にたどり着いた。

部屋の真ん中には大きな水晶があった。

「では、ここに手をあててください。」

言われるがままに、手をあてる。

すると近くにあった、機械からカードが出てくる。

「ほう、これは、おもしろいですね。これは、ここの学生証みたいな物です。自分の力が

書かれているので、あまり見せないのがいいでしょう。」
カードを見る。

遊馬太陽 職業 魔人

—

筋力EX 精神力EX < ruby > < rb >

脚力 < / rb > < rp > (< / rp > < rt > スピード < / rt >

< rp > (< / rp > < / ruby > EX

魔力A + 知力C + —

—

魔法属性 創造 空間

色々ツツコミ処が満載すぎる。

職業 魔人って

EXって。

創造って。

色々壊れて笑えてきたぞ。ハハッ

「なあ、ソフィの筋力何だった。」

すると出てきたカードを手にとって言った。

「B+ですね。」

「ついでに翔は。」

「.....」

翔のことだから、『ついでって？』って言うと思ったのに。

「ま、まさかソフィ以下.....」

「おお、C+.....」

そういうと、頂垂れた。

するとその横から安西モドキもといホウスイ先生が現れる。

「そう落ち込む事はないよ。世界の格闘技のトップレベルでもBですよ。」

「まさか、ソフィってバケモノ」

そういうと、ソルはソフィに引きずられていた。

死にたくなければ撃て！

ドゴオン。

ソルがソフィがその音を聞いた。

遙か遠くからの爆音だ。

敵軍が攻めてきたのだ。

いそいでそちらに向かって走る。

「この国は、平和じゃなかったのか」

そういうと、すこし遅いスピードでついてくるソフィが枝を切りながら問いに答える。

「平和だったわよ。けどある国が魔王と手を組んで・・・」

そういうことか。

納得した。

そうこうしている内に戦争の最前線に着いた。

この世界は銃弾戦らしい

銃に魔法を込めて撃ち合っている

俺は、力の限り叫ぶ。

「撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだっ」

すると戦場は、もっと状態が悪化した。

飛び交う魔弾の数が遙かに増えた。

ソルは戦場のど真ん中に飛びこみ黒い剣つまりルソで立ち向かう。

後ろの兵士が肩に手を置き囁いた。

「頼んだ」

俺は、ルソで敵を切り刻んでいく。

遅れてきたソフィが、泣き崩れながら叫ぶ。

「ソルっ・・・えぐっ・・・死んじゃうよ・・・ひっく」

「それでも・・・それでもっ俺は守りたいものがある。だから戦うんだ。」

俺は兵士に指示をだした。

「みんな、聞いてくれっ。俺は俺、お前はお前だ。それぞれできる事がある。だからお前らは姫を守れっ」

そついうと兵士50人程残して兵士は消えた。

「死にたくなければ撃て！お前がお前を生かすんだ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6073k/>

ライデビル

2010年10月9日00時26分発行